

コミュニティのあり方が忘却されてきたことと、それに付随して生じてきた過去の血生臭い暴力沙汰に違和感を抱く。が、中部高原の

コーヒー栽培は、かつてのゴールドラッシュのように、開拓者を盲目にしてしまうのだろうか。

「木の人」

—植物の名前をもつ人びと—

八 塚 春 名*

タンザニアのサンダウェという人たちの村でフィールドワークを始めた頃、私のもっぱらの作業は、植物を採集し、方名と用途を尋ねることだった。「この木の名前は?」「何に使うの?」という簡単な会話でもなんとか作業ができ、毎日増えていく標本によって、目に見える形で「調査をしている」という実感が湧く。まだ言葉もろくに話せない、調査の仕方も分からない、慣れないことだらけの新米フィールドワーカーにとって、これほどやりやすい調査はなかった。毎日歩いて、植物を採集し、名前を聞く。こんなことを繰り返していたある日、ふと気付いた。友達になった女の子の名前と、採集した植物の名前が同じなのだ。そういえば、お世話になっている家のお父さんの名前も、お母さんの名前も、植物と一緒に。「そうか、かれらは植物の名前を人の名前に付けているんだ!」そう気付いた時、私はとてつもなく大きな発見をしたかのように、うれしくて、わくわくしたことは今でもよく覚えている。

それ以降の私の植物採集は、もっぱら「あなたの名前の木はどれ?」から始まった。レバーさん、アマタさん、ゲレさん、デゲラさん、カツァワさん、ホアさん…出てくる、出てくる、植物の名前。これまでに私が聞き取れたものは、男性の名前になっているものが 25 種、女性の名前になっているものが 20 種である。もちろん例外もあって、たとえば鳥の名前や星の名前など、植物由来ではない名前をもつ人もいる。しかし村の多くの人たちは、45 種の植物の名前を共有している。男性ならゲレさん、レバーさん、デゲラさんなんて山のようにいるし、女性もカツァワさんやホアさんなんて、一家にひとりいるんじゃないかと思うくらいに多い。そしてある日私にも「テンカ」という名前が付けられた。テンカ (tenka: *Grewia praecox*) は、シナノキ科の木本植物で、小さくて黄色い花がたくさん咲き、全体的にこんもりした木だ。乾期の終わってから雨期の初めにかけて、小さくて、砂糖のように甘い実をつける。サンダ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ウェにとっては典型的な女性の名前のひとつである。テンカという名前をもらったその日から、私はサンダウェの一員になれたみたいで、とにかくうれしくて、うれしくて、「私はテンカっていうの。」と方々で言って歩いた。しかし、村にテンカは大勢いる。だから、「私と同じだねえ。」とか、「うちの子と同じだよ。」とか言われることがしょっちゅうだった。それでも、村の人たちも私がサンダウェ語の名前をもったことを喜んでくれていたようで、私にはそれがまたうれしかった。

私のフィールドには、多幹化して幹が30本にも40本にもなる木がたくさん存在する。植生調査をする時に、幹の数を数えるのは本当に大変な作業だった。特にテンカは多幹化する植物の代表格であったから、インフォーマントやアシスタントが「テンカは子だくさ

んだねえ。40人も子どもがいるよ。きっとだんなさんは大きな畑をもっているんだろう。ハルナはこんなに子どもがいて、大変だね。」などと、幹を子どもにたとえてよく冗談を言っていた。また、アシスタントの女の子はツェゲ (*lege*) という名前をもち、それはくつつき虫のように服にくつつく種子をもつ植物と、その種子自体を指す名前なのだが、私と彼女はしばしば「ツェゲは、もう、ほんとうに鬱陶しい！あぁ、また私の服にくつついている！」と冗談を言い合ったものだ。

では、なぜ、こんなふうにみんな植物の名前をもっているのかというと、それはかれらにこんな習慣があるからだ。サンダウェは、子どもが生まれ、やがてへその緒がはがれ落ちると、それを林の木の下に置きに行く。そしてその木の名前を子どもに付ける。名付けに関しては基本的に両親や祖父母の意向が優先されるが、へその緒を置きに林に入るのは、子どもの両親ではなく祖父母やおば、または近所の人などである。男の子どもの場



写真1 隣の家の子ロボカ (*loboká: Stropharthus eminii*) 君

彼のふたりのお兄さんは、デゲラ (*degera: Dichrostachys cinerea*) 君と、センラ (*senlla: Terminalia sericea*) 君という名前。



写真2 多幹化したテンカを伐るレーバ (*lééba: Xeroderris stuhlmannii*) さん

合、バオバブのような大きな木、アカシアのようにトゲのある木が多く、女の子どもの場合、テンカのように甘い果実が実る木や、かわいらしい花が咲く木が多く用いられている。私にテンカという名前を付けてくれたふたりの友人は、ブタとカツアワという名前だが、ブタ (*buta* : *Tapiphyllum* sp.) は雨期になると青紫のかわいい花をたくさん付け、カツアワ (*k'ats'awa* : *Boscia mossambicensis*) は黄色やピンクの少し渋味のある果実を付ける。

出産時、もしくは出産後、母と子が眠るベッドのある部屋には床一面に砂が敷かれる。そして、へその緒を林に置きに行く日まで、その部屋の砂を捨ててはいけなし、掃除もしてはいけなし。また、子どもは生まれてからこの日まで、背中におぶわれることはない。この日、祖母やお婆は、初めて自分の孫や姪を背中におぶい、そして部屋を掃

く。砂とゴミは、林にもって行かれ、へその緒と一緒に木の下に置かれるのだ。Ten Raa [1966: 180] によると、この習慣は、「胎児の状態 (fetal status)」から「生きた子ども (living child)」への通過儀礼であるようだ。

余談だが、こんな習慣をもつかれらに、「私のへその緒は、木箱に入った状態で、まだ今でもお母さんが保管しているよ。」と何度か言ってみたけれど、言うたびにえらくびっくりされた。しかし、なぜ日本では子どものへその緒を保管するのか、その理由を知らない私は、「記念に…」とあいまいに答えていた。少し調べてみてわかったのだが、日本ではもともと、母と子を何ヵ月もつないでいたへその緒は、子どものお守りだと信じられていたようだ。だから、大病したら煎じて飲ませる、なんていうことも行なわれていたらしい。「記念」という説明には納得してもらえなかったけれど、「お守り」と言えば、きつとかれらも納得してくれるだろう。

さて、ここまで述べると、「では、かれらにとって自分のへその緒が置かれた木は特別な存在なのだろう」と、思われるかもしれない。実際、私もそんなことを期待していた。しかし、へその緒の持ち主である本人は、まだ右も左もどころか何もかもわからない赤ん坊である。また、両親がその場に居合わせることはないので、両親も実際にどのどの木の下に自分の子どものへその緒が置かれたのか、知らないことが多い。つまり、かれらは自分のへその緒が置かれた木の種類は当然知っているものの、「その木」自体を知らないのだ。同様に自分の名前になっている木に



写真3 診療所でへその緒を切ってもらった赤ちゃん
彼女は2週間後に私と同じテンカという名前になった。

についても、特別に親近感をもっているわけでもない。

では、サンダウエは植物とあまり密なつきあいをしていないのか、といえば、そうではない。かれらは薬、調理具、猟具などをはじめ、さまざまなものを、植物を材料にして自分たちで作る。また、食用になる植物も多く、毎日のようになんらかの野生植物や半栽培植物が食卓に並ぶ。バオバブ (*Adansonia digitata*) ひとつをとってみても、葉はおかずへ、実はおやつやジュースへ、内樹皮はほうきやハンティングネットへ、種子は砕いて調味料へ、さらに殻は容器へと、1種の植物が実に多様に用いられている。しかし、新米フィールドワーカーであった私にとって、物質文化や食事など目に見える植物利用がどんなに豊富でも、かれらが自分の「その木」を知らないという事実は、大発見を非常にしょんぼりしたものに変わってしまったようで、ショックだった。

でも、今はこう思う。たった1本の自分



写真4 夕食のためにバオバブの葉を選別

にとって特別な木との関係ではなく、村を造るすべての植物との間に自然に築いてきた関係。これこそが、大切なことである。だから、たった1本の木の特別さなんて、かれらにとっては小さなことなのかもしれない。自分の「その木」は、もしかしたら誰かによって伐られてしまったかもしれない。もしかしたら朽ちたかもしれない。しかし、そんなことはたいしたことではないのだ。1本の特別なテンカが失われたとしてもそれは大変なことではない。しかし、もし村を造る植物の中から、テンカという種類がなくなってしまったとしたら、それはかれらにとって、「あたりまえ」であったことが壊れるとても大変なことなのだ。自分の身近な距離にテンカがあると、無意識的に認識していることこそが「あたりまえ」であり大切なことなのだ。

植物に囲まれて、自然を十分理解して生活してきたかれらだからこそ、築けるこの関係に、自然と距離を隔てた付き合いしかしてこなかった私は、気付くことができなかったのである。

木にまつわるこのような名付けの習慣をもち、木について非常に詳しいサンダウエの人びとは自らを「木の人 (*watu wa miti*)」と表現することがある。自分たちをそう表現する時、かれらの顔は自信と誇りに満ちている。私はそんなかれらに憧れ、少しでも近づきたい、という想いから、今もフィールドワークを続けている。近年、サンダウエの村では県政府やNGOなどによって換金作物の栽培が推奨されている。また、村に中学校が



写真 5 バオバブの内樹皮で作る酒を絞る道具（左）とハンティングネット（右）

開校し、子どもたちの多くが進学できるようになったことにより、多くの世帯で多額の学費が必要になっている。このような現状の中、今後、村にはますます畑が増えていくかもしれない。しかし、たとえどんなに換金作物を栽培するようになったとしても、どんなに新しいものがたくさん入ってきたとしても、「木の人」が「あたりまえ」にしている植物との関係を壊す日が来るとは私には思えない。今後、かれらの社会がどのように変化したとしても、自分たちは「木の人」だと自

信をもって誇り続けられるかれらでいて欲しい。

『『木の人』はカッコいい。』私は声を大にしてかれらに伝えていきたい。

本稿は、筆者が所属するNPO法人アフリック・アフリカのホームページに掲載したエッセイを、大幅に加筆、修正したものである。

引用文献

Ten Raa, E. 1966. Geographical Names in South-Eastern Sandawe, *Journal of African Languages* 5: 175-207.

森の声と村の音

片岡美和*

「夜が明けるよ」夜明けを告げる鳥の声で目が覚める。「はいはい」調査に行く時間だ。家のお母さんはもう起きていて、お湯

を沸かし、米を炊く準備をしている。熱帯といっても標高 800m にある村の朝は冷える。薪の火で暖まりながら、甘いコーヒーと揚げ